ひと・まち・自然

トラまちPress
(財)世田谷トラストまちづくり情報誌
Vol. 4
March 2010

特集

若者が育ち、育てるまちへ

人びととの出会いを楽しみながら
マイスタイルでまちと関わる若者たち

せたがや散歩日和

第4回

みどりのフィールドミュージアムをめぐる

成城学園前駅～国分寺崖線～成城学園正門へ

結び葉

第4回 谷津田春吉さん

多摩川を見守る川の番人

特集

若者が育ち、育てるまちへ

地域に目を向け、まちと関わることを
自分の活動の中心に
据えようとしている若者が増えている。
それも「まちづくり」と肩ひじを張らないで。
まちの人びととの出会いを楽しみ、
想いをカタチにして発信し、
時には思いがけない発見をする若者たちの活動は、
まちにあらたなつながりを生み出している。
先輩たちの実績を受け止めながらも、
自分たちの感性を信じてマイスタイルで動く。
そんな若者たちは、まちづくりの新たな潮流を予感させる。

1 住民の声を集めるために、下北沢駅前に若者がとりつけた黒板。2 おそろいのTシャツで地域の祭りに参加する中高生。若いパワーが祭りを盛り上げる。3 インターンシップで子どもたちと一緒に創作活動。4 子どもたちと一緒に雨の中をまち歩き。5 中高生がリーダーの野外キャンプ。6 自ら企画したイベントで子どもとふれあう大学生。7 お祭りで出店。みんなでつくるイベントは楽しい。8 高校生が考えたお弁当づくりのプロジェクト。9 活動仲間と一緒に。おそろいのTシャツを掲げて。10 みどりを守るために地道に草刈りをする若者たち。

のざわテントーひろば「みんなのトイレ」を真剣に記録する佐藤さん。

チャット、オタク、草食系と、今どきの若者を象徴する言葉は、どれも体温が低そうだ。だが世田谷の「まちづくり」を支える若者たちは熱い。自分が楽しいと感じなければ、人を幸せにできないこともよくわかっている。「まちづくりって何だろう?」時に疑問にぶつかりながらも、前向きだ。

コミュニティカフェを友人と営む女性、親子が自由に遊びに行ける遊び場のリーダー、公園を管理する仕事を始めたばかりの女性、建築や都市について学ぶ大学院生さまざまな形でまちと関わり、発信者になっていくことを楽しんでいる若者たち。今、どんなことを考え、行動しているのだろう。地域共生のいえ・岡さんの家のこたつを囲んで語り合う4人の若者たちの、飾り気のない発言にじっくり耳を傾けてみよう。

誰にも会わなくても「帰ってきた」って思えるまちはホッとします。

現在の活動となぜそのような活動に関わることになったか教えてください。

佐藤　東京都市大学の大学院で建築や都市について学んでいます。建築を学ぶ中で、1軒の建物をつくっただけでは、まちをよくする力にならない。そんな思いから、もっと大きな「まち」というフィールドに関わりたいと思ったんです。じゃあ「まちづくり」ってなんだろう?そんな折に世田谷トラストまちづくりのインターンシップ制度のことを知り、住まいや場づくりを技術面から支援する「NPO法人SAHS」の活動に参加し

佐藤隆史（さとう たかし）
東京都市大学建築学科大学院2年生。
現在、修士論文をまとめながら
仕事を模索中。
2008年度学生インターンシップ参加。

学生時代に活動した場所に今も通って、やる気をリセットしています。

田中　東京農業大学造園科学科を卒業後、2009年4月から埼玉県の公園緑地協会に所属して、県の公園を管理する仕事に就いています。大学在学中に在籍していた研究室で「桜丘すみれば自然庭園」の活動に関わり、毎月のイベントのお手伝いなどをしていました。ここでイベント企画や運営にも携わらせていただいたことが、現在の仕事でも役に立っていますので、大変いい経験になりました。

野下　「のざわテットーひろば」で、子育てと親子の遊びを支援するプレーリーダーという仕事を5年ほどしています。僕も田中さんと同じ農人の出身です。田中さんと違うのは、その頃の僕は「自然系ってカッコいいじゃん」くらいの軽いノリで（笑）。でも、「人間が健やかな生活をするために、空間をつくっていく」という、大学でのざっくりとした概念には、共感を覚えていました。後輩が、プレーパークの活動に関わっていたのがきっかけで、卒業後「NPO法人プレーパークせたがや」のプレーリーダーになり、現職に至ります。僕の場合は偶然の巡り合わせがたくさん重なって、今がある感じです。

井上　生まれも育ちも世田谷です。現在、世田谷線の松原の駅前で、「シーマ・シーマ」というコミュニティカフェを友人と開いています。地元で、長年リサイクルショップをやっていた方が高齢になられて閉店することになり、その場所を使って何かできないかと、私たちにお話をいただいたのがきっかけです。

桜丘すみれば自然庭園でのイベント。学生主催でたくさんのことが学べる。

同じ時間にそこに人がいて、開いているっていうことがすごく大事なんだと感じています。そうすることで、まちの人たちの生活の一部になる。そんな当たり前のことが、地域とのつながりなのかなと。

野下　僕が関わっている子どもの遊び場も、緒だなと思います。毎日開いていて、誰でも来られる。ふらっと立ち寄れる。その場所に僕はいて、時間を共有できる。そのことがすごく面白い。

田中　大学の講義で「すみれば」のマネージメントを考えた時に、そこで採れたドングリを近くにある児童館に持って行き、そこの施設を貸してもらってドングリクッキーを作れないかと。「すみれば」から児童館へ、点が線になっていくことを実感しました。「すみれば」を発信源として、まちに関心を持つ人が増えていったらこれはスゴイぞと。今の公園管理の仕事でも、やがてそういうことができたらいいなと、思っているところです。

佐藤　「NPO法人SAHS」の活動のお手伝いをしてみて、自分は建築を学んでいるので、ハードのことは多少知識があったんですが、そこに暮らす人たちのことを、何も知らなかったことに気づきました。これは大きな収穫だったかもしれません。で、いっそう「まちづくりって？」という疑問がふくらんじゃったんですけど（笑）。

上段／吹き抜ける風が心地よい。のざわテットーひろばのテラス。
下段／「よいしょ！」掛で餅つき。都会では、親も子も貴重な体験だ。

井上　私は朝から晩まで「まちづくり」に狂っている両親のもとに育ちました（笑）。だからかな、「まちづくり」っていう言葉にちょっと抵抗が…。

佐藤　なんかね、すごく肩に力が入っているイメージがあるよね。

井上　それがちょっとうんざりしちゃって。「まちづくり」って言葉でくくらなくてもいいまちになっていればいいんじゃない？って。

野下　どうしても言葉でくくると窮屈な気はしますよね。道に面した縁側に座って、毎日通りを眺めているおばあちゃんがいる。それだけでまちづくりっていう気もしていて。

田中　私にとって、今やっていることが、自分が表現したいことをとって、具体化するためのツール。そんな気がしているんです。そのツールに賛同する人が集まってきたら、そこからひろがっていく面白さがあるのかなと。

全員　そうそう。わかるわかる。

経済的にはギリギリだけど、人のつながりややりがいを優先しています。

「まち」に関わることを仕事にしていくうえで、経済的なバランスはどのように考えていますか？

佐藤　僕はまだ学生なので、今、まさに迷っているところです。就職活動もしていますが、売り上げ至上主義の職場はあまり自分に合わない気がしていて。かといってボランティアでは、生活をどう維持していくかも気になりますし…。

野下　僕はもうすぐ子どもが生まれるので、そのあたりのバランスはとても切実です（笑）。切実ですが、たくさん収入があっても自分の好きじゃないことは、僕にはできないと思っていて。今の職場は恵まれたことに、「そろそろ生まれます」と貼り出しておけば、子どもの物は、ほとんど買わずにす

田中貴子○たなか たかこ
東京農業大学造園科学科卒業。
現在、（財）埼玉県公園緑地協会勤務。
東京農業大学在学中に
「桜丘すみれば自然庭園」の活動に関わる。
http://sumireba.exblog.jp/i8/

野下　健○のした たけし
東京農業大学造園科学科卒業。
現在、「のざわテットーひろば」で
プレーリーダーとして働く。
http://tetto.kuronowish.com/

むんです。結局のところ、何に価値を見いだすかということのような気もしています。

井上　私たちが始めたカフェも、採算はまだまだです。スタッフのお給料は出せていません。みんな実家から通っているから、なんとかなっていますけど。

田中　週末以外は公園管理の仕事に就いていますが、月に1回、学生時代に関わっていた「すみれば」のイベントには顔を出しています。そこで、「そうそう、こういうのがいずれは今の職場でもできたらいいな」と気持ちをリセットしています。今の私には、これがモチベーションを維持していく大切な活動になっています。

佐藤　僕はハードとソフトが融合したまちづくりに関わりたいっていう思いはあるんですが、それが具体的にどのような仕事なのか、まだ見えてなくて…。

野下　面白いことをやり続けられるのなら、それに超したことはないけど、でも覚悟はいるよね、それなりに。ただ最近販売業の世界でも、お客様の満足度を重視することが売り上げにつながる、なんていう動きも出てきているので、僕たちのやっている「人のつながり」の部分って、これからいろんな分野で必要とされてくる事なのかもしれない。

上段／小さな赤ちゃん連れのお母さんが、カフェでなごむひととき。
下段／「こんにちは」ベビーカーで、おんぶで、楽しげに集まる。

まちの人たちと同じ時間、同じ場所を共有する大切さを感じています。

皆さんが考える「いいまち」とはどんなまちで、そのために大切なことは何だと思いますか？

佐藤　今、大学院で防犯について研究しています。僕は防犯組織がつながって、まちにいい影響を与えたらいいなと思っているんです。

野下　僕はまちの防犯って2種類あると思っています。積極的に良い人と悪い人を分ける防犯、もうひとつは悪い人ではないけれど、怪しい人もいるよねっていう許容範囲を増やしていく防犯。まちに見かけない人や、あやしい人たちを シャットアウトするのって、冷たい防犯っていう気がしているんです。僕は許容範囲を増やしていく方が、自分自身のスタンスとしてもしっくりくる。あたたかい防犯ができれば、それをきっかけに人と人がつながるような気がします。

井上　小学校の「通学路危険マップ」っていうのに「ここでスーツを着た人がウロウロしている」と書かれて、父が「それ、オレだ」なんていうことがありました（笑）。

野下　今って、通学路に人の目がないんだよね。1階が駐車場になっていたり、高い塀で囲まれている家が増えてきて。だからって誰でも危険っていうのもねえ。

佐藤　僕は川崎で生まれて、17年ほど住んでいたんです。その後引っ越したまちでは、住んでいるだけで近所付き合いがなくなってしまって、そのことがすごく寂しい。逆に川崎にたまに行くと、誰とも会わなくても安心するし、「帰ってきた」って感じがする。住んでいた頃は近所付き合いって、煩わしいと思っていたんですけどね。

田中　「帰ってきた」って思えるのって安心しますよね。私はずっと同じところに住んでいるので、近所の人たちの顔がなんとなくわかります。顔を見ると「おかえり」なんて言われる。それが普通なんです。

井上　私は祖父の代から世田谷の今の場所に住んでいるので、もちろんご近所はみな顔見知り。なんだか不自由だなと思っている時期もあったけど、今は逆に、それが自分を守ってくれていたんだと気づき、ありがたいと思っています。

野下　僕たちがやっていることって、地域にとっての不安を埋めることや、その場を発信源として、まちに別の関係を構築することではないのかな。それはきっと防犯にもつながるし、「住みやすいまち」にもなっていくのかなと思います。

最後に今後どのように今の活動を展開していきたいかを聞かせてください。

井上　最近、お店に来たお客さんに「電車の中であなたたちみたいな若い子が、携帯でしゃべっていると怖いと思ったけど、あなたたちと話したら怖くないってわかったわ」って言ってもらえました。私たちみたいな世代と、おじさんおばさんたちってお互いを知らな過ぎるのかも。それなら、まちの長老と言われている人たちに、「まちづくり」にどうして関わろうと思ったのかを聞くシンポジウムをやるのもいいかなと今、企画中です。いいところは受け継いで、「まちづくり」の王道みたいで、ちょっとテレるんですけど（笑）。

上段／ゲットした虫の説明をする農大生。遊びながらお互いに学ぶ。
下段／野下さんが活動する「のざわテットーひろば」。親子でのんびり。

田中　私たちみたいに、まだ社会に出て間もないからこそ言えることってある気がしています。全体が見えていないからこその意見って「生意気」と思われても、発言してみる。もしかしたらそれでいい方向に進むこともあるかも、なんて思っています。今の私は、「すみれば」のように「開けた公園づくり」が目標ですね。

佐藤　若者ならではの、まちに関わるネットワークができるといいなと思っています。他の大学生や若い人たちとつながって、次の世代にもこの楽しさが共有され、引き継がれていったら、きっとまちがよくなる。そんな気がしているんです。

野下　僕のやっていることって特殊な人の特別なことじゃなくて、誰しも関わりのある暮らしのすぐ横にあることなんです。「のざわテットーひろば」では、屋外で子育て支援をすることで、豊かな人間関係が育っていて、いいまちづくりにつながっている。それをいろんなところに伝えて、広げていくのが、今後の僕の役目かなと思っています。

本日はありがとうございました。

（2009年11月収録）

井上未羽 ○いのうえ みう
武蔵野美術大学芸術文化学科卒業。
現在、友人と世田谷線松陰駅前で
コミュニティカフェ「シーマ・シーマ」を営む。
http://seema-seema.com/

現場に触れ、学び、成長する若者たち

2009年度学生インターンシップに参加して

大学生、大学院生、専門学校生を対象に、毎年7月下旬～9月末までの間、区内のさまざまなまちづくりの現場へ参加できる、(財)世田谷トラストまちづくりの学生インターンシッププログラム。活動現場に直接関わり、研修プログラムを学生自らがアイデアを出して企画。森へ、川へ、人のなかへ飛び出して行った学生たち。ネットや講義では体験することのできない現場の空気を、彼らはどんなふうに味わい、何を得たのか。2009年度は6つの現場に6名の学生が参加した。

建築基準法など、さまざまな専門知識で街を見て、歩く。

「まちづくりは人づくり」を実感

岩田満里子
首都大学東京都市環境学部建築都市コース4年生

NPO法人玉川まちづくりハウス
「まちづくりの現場を体験する」

世田谷まちづくり条例のワークショップに参加。また、「まち歩き見学会」の事前打ち合わせから参画し、当日は記録係として従事。

「まち歩き見学会」に参加して、専門家とともに条例や建築基準法がどのようにまちづくりに反映されているのかを体験できたのが意義深かった。それぞれの立場での情報共有の大切さを実感。「まちづくりは人づくり」であることをあらためて認識した。自分自身もまちづくりに関わることを仕事にしたいと考えているので、この体験を今後さらに生かしていきたいと思っている。

ボールをニギニギ。スキンシップも大切なコミュニケーション。

親子の笑顔に迎えられ、緊張がとけた

芝　沙織
跡見学園女子大学マネジメント学科2年生

野沢3丁目遊び場づくりの会
地域の人たちとの関係づくりについて学ぶ

定例ミーティングに加わり、通常の子育て支援活動の補助。「親子クッキング」のイベントの補助などを行った。

なかなか活動の現場に慣れない私だったが、子どもたちの笑顔に迎えられ、保護者の方々からたくさんのお話を聞くことで少しずつうちとけることができた。さまざまな場面で受け身になってしまい、自分から積極的に行動を起こすことができなかったことが悔やまれる。コミュニケーションの大切さ、相手の立場に立って物事を考えることの難しさを痛感した。

緊張しつつ、地域活動をつなぐネットワークの会議に参加。

主体的に貢献することの大切さに気づく

小栗史也
東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻修士2年生

NPO法人SAHS
まちづくりを行うNPO法人の活動を学ぶ

ちとふな祭りの手伝いや地域活動をつなぐネットワーク「SAN」の会議に参加。「NPO法人SAHS」の定例会と、トイレワークショップに参加。

「地域で行われているまちづくり活動を知る」という消極的な動機だったが、まちづくり活動に携わっている人たちは、積極的で得意分野を活かす人たちだった。ゼロの状態から企画、提案し、多くの人を巻き込む。自分に欠けていた「主体的に貢献する姿勢」に気づけたことは収穫だった。

鎌の研ぎ方を教わる。教える方も、教わる方も真剣そのもの。

年配の方はタフでエコだった!

市川雄平
成城大学政策イノベーション学科3年生

成城みつ池を育てる会／成城三丁目緑地里山づくりコア会議
環境保全の現場を体感しボランティアの現状を知る

「みつ池を育てる会」では定例の会議に参加するとともに、土留め作りや、池の泥さらいなどの実際の保全活動にも参加。成城三丁目緑地でも、ボランティアとともに里山の保全活動を行う。

年配の方が多いと聞いていたので、のんびりした会かと思ったら大間違い。皆さん「タフ」で、その行動力には脱帽だった。落ち葉はカブトムシの寝床に、切った竹は土留めに。これこそ本物のエコと実感した。住民相互のみどりに対する意識の違いや意見の相違を知れたことは大きな収穫だった。

子どもたちからは元気をもらい、大人からは生き方を学んだ。

日常生活の中で気づくまちづくり

佐原香奈
日本女子大学住居学科4年生

きぬたまあそび村、せたがや水辺の楽校
子どもと触れあいながら遊び場をつくる人と関わる

ウオータースライダーの手伝いや川遊びの手伝い、ガサガサの手伝いや、「多摩川で遊ぼう」イベント手伝い

川で遊ぶ子どもたちのパワーに、私の方が教わることがたくさんあった。その子どもたちを支える大人たちは、自由で、たくましかった。まちづくりって行政や専門家が行うことだと思っていたが、こういう人たちが日常生活の中で気づいて始めることもまた、まちづくりなのだと知ることができた。

多摩川でのスケッチ会のひとコマ。皆さん本当にお元気。

お年寄りに元気をもらった私

樋田小百合
跡見学園女子大学マネジメント学科2年生

茶論ONE COIN
高齢者とコミュニケーションをとりながら活動を支援する

アースフェスタに準備より参加。インド細密画展、ミニデイ納涼祭、男の料理教室の見学や参加。地域活動をつなぐネットワーク「SAN」の会議参加。多摩川にてスケッチの会にも従事。

ふだんの生活の中でお年寄りと接する機会は皆無に等しい。遠くに住む祖母への想いもあってインターンシップに参加。ポスターやディスプレイといったものを作ることを担当させてもらい、ものづくりと人と関わる楽しさの2つを体験し、今後の大きなヒントになったと思う。「茶論ONE COIN」で元気なお年寄りと触れ合い、私の方が元気をいただいて帰ってきた感じだ。

(財)世田谷トラストまちづくりのインターンシッププログラムの詳しい情報はホームページご覧いただけます。 http://www.setagayatm.or.jp/

せたがや散歩日和 第十四

今も清らかな水がこんこんと湧き出る成城三丁目緑地の湧水池。

みどりのフィールドミュージアムをめぐる

成城学園前駅～国分寺崖線～成城学園正門へ

樹林地や緑地、河川や湧水など、
みどりが多く残る世田谷の地域全体を一つのミュージアムとしてとらえ、
散策できるようにした「世田谷・みどりのフィールドミュージアム」。
今回は、成城学園前駅周辺地区にあるこの自然の博物館をめぐってみたい。
案内してくれたのは、子どもの頃から成城地区で暮らし、
「成城三丁目緑地里山づくりコア会議」代表を務める栗林勝彦さん。
およそ3時間の散歩道、どれだけ豊かな自然と出会えるだろう。

庭に植えられた桜とヒマラヤ杉

成城学園前駅から明正公園へ

高級住宅地、成城。このあたりには、今も数多くの緑地や屋敷林が残り、世田谷区内でもいち早く「みどりのフィールドミュージアム」として整備された。都会に存在する豊かな自然を求めて、さっそく成城学園前駅から南に向かう。まず発見したのは、見事な桜の老木だ。

成城文化史によれば、そもそもこの地は、「森林と草原につつまれた狐狸すら棲息する未開の地」であったという。大正14年、この地に成城学園が移転するとき、みどり豊かな理想の学園都市をつくろうと開発計画を立てたのが、今の成城のまちの始まりだという。「この理念のもとでまちづくりが進められ、宅地には低い生け垣を作り、庭には花木を多く植えることを条件に、一般市民に分譲されたと聞きます。学園正門前や住宅地の主要道路にも、たくさんのサクラやイチョウの木々が植えられました。その一部が今も残っているんですね」

なるほど、歩道のところどころに桜の古木が点在している。みどり豊かなまち、成城の歴史は、80年以上も前からスタートしていたのだ。

駅前の通りをさらに進むと、カトリック成城教会がひっそりと建つ。建築家、今井兼次氏設計で、1955年に建てられたこの教会は、都会の喧噪を寄せつけない静謐なたたずまいで、一歩足を踏み入れるだけで気持ちが静まる。「ここの鐘の音はすばらしいんですよ。日曜10時のミサのときだけ鳴らしますから、タイミングが合えば、ぜひ聴いてみてください」

穏やかな気持ちで歩を進めれば、右手に明正公園が見えてきた。印象的なのは、大きなヒマラヤ杉だ。「これも昭和の初めにこの地域で、各家庭にヒマラヤ杉を植えようという運動がありましてね、それが残っているんです。当時は敷地が500坪ぐらいあるのが当たり前でしたから、大きなヒマラヤ杉も2～3本ぐらいは植えられたんです」

さすが成城、庭も規模がデカイのだ。

1 成城学園前駅にほど近い歩道に点在する桜の老木。

2 明正公園にそびえる大きなヒマラヤ杉。

3 1955年竣工のカトリック成城教会。

4 シンプルながらモダンなたたずまいの教会内部。

5 ヒノキやコナラなどの緑豊かな雑木林が残る、区立成城三丁目緑地。

市民の手で守る里山の風景

成城三丁目緑地へ

駅前からおよそ10分、目の前に雑木林が現れた。国分寺崖線の斜面地に残る区立成城三丁目緑地だ。ここは栗林さんら市民ボランティアが管理している緑地で、笹狩りから落ち葉かき、竹の伐採や遊歩道の補修まで、地元の人びとの手によって行われている。また、隣接する明正小学校では総合学習の時間に自然観察や里山の保全活動を行っている。

総面積2ヘクタールを誇る緑地内には、スギやヒノキ、サワラなどの針葉樹やコナラ、クヌギなどの広葉樹が混在する雑木林をはじめ、区内でもっとも豊富な水量を誇る2カ所の湧水池を有し、今なお里山の面影を残す。サワガニ、カブトムシをはじめ、カワセミ、ソミやノスリなどの野鳥といった生きものの宝庫でもある。

「子どもの頃はこのあたり一面田んぼでね、湧水は用水として、樹木は燃料として薪などに利用されていました。崖下には野川の清流が流れ、茅葺き屋根の水車小屋もあったんですよ」かつて人びとの生活と深く関わってきた豊かな里山の風景が、目の前にパーっと広がった。

感慨にふけりながら木々の間を歩いていると、「ほら、あ

みどりのフィールドミュージアム【みどりのふぃーるどみゅーじあむ】

世田谷区は、身近な自然の豊かさやすばらしさを知り、区民共有の財産として守り育んでいく取り組みとして、地域（フィールド）全体をひとつのミュージアム（博物館）としてとらえ、学習・体験の場とする「世田谷・みどりのフィールドミュージアム」の整備を行っている。第1号となる成城学園前駅周辺地域では、「成城みつ池」、「成城三丁目なかんだの坂市民緑地」など、国分寺崖線周辺の8カ所の緑地に総合案内板、解説板、シンボル柱を設置し、散策用のマップが作成されている。マップは4月以降、世田谷区役所みどり政策課ほか、ビジターセンターや各緑地などで入手できる。

せたがや百景【せたがやひゃっけい】

区民が「好ましい」と感じる風景の中で生活し、みんなで守り育てていくことを願って、1984年（昭和59）に、世田谷区が区民から推薦を募り、100の風景を選定した。地域の歴史・風土・文化が現われている世田谷独特の風景が選ばれているが、今回のコースでは、成城のイチョウや桜の並木、三・四丁目の崖線など、7カ所を見ることができる。

ビジターセンター【びじたーせんたー】

区民と連携して環境共生・地域共生のまちづくりを進める（財）世田谷トラストまちづくりのビジターセンター。館内には、国分寺崖線の自然などの展示コーナーやライブラリーがあるほか、花とみどりの専門員による園芸相談も受付けている。また、トラストボランティアグループの活動拠点にもなっている。

れがコナラの赤ちゃんですよ」と栗林さんの弾んだ声が聞こえた。

「里山の雑木林は人が手をかけ管理していくことが大切なんです。自然のままに放っておくと草木が茂り、風通しも日当たりも悪くなり、他の植物が育たなくなる。昔は生活と密接な関わりを持ち管理されてきたこの林も、今では生活との関わりが薄れ管理されなくなってしまいました。そこで、私たちがこの里山の自然を守るために、下草刈りや落ち葉かきをしたり、木が枯れてしまった場所などに植えるために、ドングリを拾って苗木を育てるなどの保全活動を行っています」

長い年月をかけて守られてきた自然は、今も「まちの里山」として、多くの地元の人びとの手によって、しっかりと守り育てられている。

崖線から眺める富士の絶景

こもれびの庭市民緑地から野川へ

里山を抜けて住宅街を進むと、世田谷区の文化財にも指定されている南欧風建築の邸宅が見えてきた。その奥に広がるのが、四季折々の草花が楽しめる洋風庭園のこもれびの庭市民緑地だ。モミジや桜などの木々とともに、ここにも立派な3本のヒマラヤ杉を発見した。

こもれびの庭市民緑地を出て、少し先にある不動橋へ。ここは、並行して架かる富士見橋とともに晴れた日には、遠く富士山や丹沢の山々も望める絶景スポットで「せたがや百景」になっている。

少し戻り路地を入ると、傾斜地を利用したなかんだの坂市民緑地が右手にある。さらに坂を降りていくと崖（がけ）の林市民緑地があり、その先を右に曲がり、しばらく進むと、先ほどの不動橋の下にある喜多見不動橋に到着した。大きなクロマツと樹齢100年以上といわれるイロハモミジが見事だ。ここでは本堂にお参りして満足することなかれ。その右奥には横穴を発見することができる。薄暗い洞穴を進むと、奥にお堂があり、知る人ぞ知る神秘的空間となっていた。

「昔はもっと木々が多く、鬱蒼（うっそう）として薄暗い、近寄りがたい場所だった」と、栗林さんが懐かしむ、成城みつ池の森を右手に眺めながら、成城十一山市民緑地に。国分寺崖線の傾斜を利用した緑地で、崖線が11の起伏のある山のように見えたことから、この名前がついたという噂。高低差10mはある斜面を一気にのぼると、富士山が見えた。国分寺崖線の斜面は南西に面しているので、どこも見晴らし抜群なのだ。崖線の台地の上にはアカマツが多いのが特徴だが、ここはアカマツをはじめ、スダジイやアカシデ、クヌギなどさまざまな種類の木々があり、国分寺崖線の自然を一度で味わえる。

より詳しく崖線の自然を知りたければ、その先の成城四丁目緑地にある崖線樹木園を覗いてみよう。ガマズミ、コブシ、ヤマブキ、アセビ、ヤブコウジなど約18種類の木々が植えられ、崖線の木々の豊富さが伺える。

斜面を降り、左に折れると野川に出る。歩き通しで疲れたときは、ビジターセンターでひと休みするとよいだろう。

1 鮮やかな草花が迎えてくれる。こもれびの庭市民緑地。

2 晴れた日には富士山や丹沢の山々が眺められる富士見橋。
3 住宅の生け垣や喜多見不動のみどりが不動坂を彩る。
4 成城みつ池緑地の湧水が流れている水路。5 国分寺崖線の木々が茂る成城四丁目広場。6 成城のまちと自然を愛し、保全活動を続ける栗林さん。

7 京風の庭園が美しい成城五丁目猪股庭園。8 成城学園の正門前に続くイチョウ並木。

生け垣と街路樹が彩る成城の街並み

成城みつ池から成城学園前駅へ

再び成城四丁目緑地の斜面を上り、成城みつ池をすぎて、住宅街を成城学園方面へ戻る。ここ成城五丁目付近も、その生け垣の美しさで、「せたがや百景」に選ばれている。「道路を掘ったときに出た土を盛って土手を作り、その上に木を植えて生け垣にしているのが、この地域の特徴です。こうした生け垣が多く残るのも、成城のみどりの多さにつながっているんですね」

途中、成城五丁目猪股庭園に立ち寄る。この地では珍しい京風の庭園で、京都の光悦寺をまねた光悦寺垣が配され、関東では珍しいスギゴケが敷き詰められている。モミジ、コブシ、ハナミズキ、モッコクなど、小ぢんまりとした園内にはさまざまな木々が植えられ、春にはこれらの花が一斉に咲き乱れ、それは見事だという。現在は園内建物の耐震工事中で休園中だが、本年6月頃には開園する予定になっている。一見の価値ある場所だ。

住宅街の桜並木を進むと、左手に成城学園を象徴する大きな松が見えてきた。開校当時、できるだけ自然の木々を活かして校舎を配置し、6本の松の巨木をそのまま正門に見立てたという。正門前には、イチョウとプラタナスの並木が続く。これもかつて学園都市を開発するときに、生徒の手によって植えられたという。

今回の散歩は、この成城学園正門前がゴール。都心からほど近いこの地に、今なお豊かな自然が残るのも、地元住民の手によって、開発当初の理想が受け継がれてきたからにほかならない。まさに街中がみどりの博物館ということを実感できた。

市民緑地【しみんりょくち】

土地所有者と地方公共団体や緑地管理機構が契約を締結し、都市のみどり保全を図る「都市緑地法」に基づく制度。当財団では1997年（平成9）から取り組んでいる。土地所有者は、所有する緑地（300㎡以上）を地域の憩いの場として公開することで、その緑地の維持管理と税制面での優遇措置が受けられる。

野川【のがわ】

国分寺市から流れ出す野川は、多摩川が長い歳月をかけて削ってできた河岸段丘「国分寺崖線」の湧水を集め、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を経て世田谷区に至り、二子玉川駅近くで多摩川に注ぐ約20kmの川。周辺には、かつての武蔵野の風景ともいえる雑木林などの自然や歴史的環境が数多く残っている。

手から手へ 人から人へ
結び葉
第4回

多摩川を見守る川の番人
谷津田春吉さん

1年365日1日3回、多摩川を訪れ、釣り人に声をかけ、子どもたちの目の前で投網「とあみ」を打ち、天然アユを採ってみせる。そんな活動を通して、身近な自然のすばらしさを伝えている谷津田春吉さんは、多摩川を愛し、守り続ける「川の番人」である。

初めて見る投網に大歓声！

ザブザブザブ。10月にしては汗ばむくらい気温の高いこの日、大きな投網を手にした谷津田春吉さんが、川の中を静かに進む。川の中央まで来たあたりで立ち止まると、「76歳になったので、力がなくなりましたが、ご容赦ください」と言いながら、ふわりと網を宙に放った。畳20畳ほどもある網が美しい弧を描いて水中に落ちる。「おわー、すげえ～」思わず川岸にいた子どもたちから歓声が起こる。その声に応えるように、網を少しずつたぐり寄せていく。息を呑んで見守る観客たち。次の瞬間、網の中で魚が跳ねた。お見事！　2尾のアユをゲットした。「採れた！！」「やった！」拍手喝采だ。

「うわ、まだ生きてる！」「谷津田さん、どうやってつかめばいいの？」「ママにも触らせて！キャー、ぬるぬるする～！」子どもたちも、緒に見ていた親たちも、みな大はしゃぎだ。

毎日のように多摩川を訪れ、見守り続ける谷津田春吉さん。

谷津田さんは瀬田で生まれ、多摩川のほとりで育ち、今も多摩川が見渡せるすぐ川岸に暮らす。砧浄水場に定年まで勤め、今は1年365日1日3回、多摩川に日参している、いわば"川の番人"だ。

「私が子どもの頃はね、学校から帰ると毎日多摩川で遊んでいました。泳いだり、魚を釣ったり、のどが渇けば川の水を飲んでね。そりゃあ、きれいだったですよー。河原には月見草とヨモギだけが生い茂り、砂利も真っ白で、今とは全然違う景色でした」目を細めて昔を懐かしむ。

「アユ、ウグイ、フナ、オイカワ、モクズガニ。魚もいろいろいてね、漁師もたくさんいました。多摩川をはさんだ登戸のあたりには料亭や旅館などがあって、屋形船に乗って多摩川のアユを食べるのが、当時の粋な遊びだったんです」

美しく豊かな自然を育んできた多摩川は、昭和30～40年代の高度経済成長期を機に、一気に水質が悪化。合成洗剤で泡立つ川から魚は姿を消し、それらを餌とする鳥も近寄らなくなった。谷津田さんは水道局に務めながら、その水質の変化を目の当たりにしてきた。

「まるで自分自身の一部を汚されるようで、つらかったですね。私自身、いつのまにか自然と川に近寄らなくなっていました」

その後、下水道が整備され、生活排水が直接川に流れ込むことがなくなると、川は少しずつ蘇り、かつての美しさを取り戻していった。

1 多摩川で採れた天然アユの塩焼きは、臭みもなくおいしい！ 2 地域の子どもたちに、投網のやり方や多摩川に棲息する生き物についてレクチャーする。3 約20kgもある投網をふわりと投げる谷津田さん。とても76歳とは思えない。4 焼きたてのアユにかぶりつく子どもたち。

「ここ2～3年はとくに水質がよくなっています。生き物の種類も多様化し、天然のアユも、毎年1万匹くらい遡上しています。多摩川のアユは90％ぐらいが天然ものですよ。アユは美しい川を象徴する魚。そのアユが戻ってきたことで、多摩川の復活を確信しました」

東京都でも、1983年（昭和58）から東京湾から多摩川に遡上するアユの量の調査を行っていて、多くの稚アユが遡上するようになったことが分かっている。*

ここ数年来、谷津田さんは、近所の小学校や自身が指導する少年野球の子どもたちに、蘇った多摩川の豊かな自然環境の大切さを伝えている。この日も、「せたがやみず水辺の楽校」が主催するイベントに参加した親子に、投網を打ってアユを採って見せたり、試食してもらったりと、多摩川の自然を体感してもらっていた。試食では、「家では魚を食べない」という小さな子も、頭からかぶりついている姿が印象的だった。

「今の子どもたちは、家に閉じこもってビコビコやってるだけでしょ。でも、小さいうちにちゃんと自然の中で遊ばないと。身近な川に、こんなに豊かな自然があるってことに気付いてほしいですね」

都会では近頃、川に入る機会などめったになくなった。でも、谷津田さんのような川の番人が見守っていてくれれば、子どもたちも安心して川遊びができる。この日も、子どもたちは腰まで水につかり、ウグイやオイカワなどを必死に追いかけていた。

「こんなふうに思いっきり川で遊べたら、心も体も元気になりますよ。この経験は、絶対に大人になっても忘れないと思いますね」

うるさいオヤジと言われても川を守るのが使命

川の番人、谷津田さんの役割はこれだけではない。釣り人に声をかけてアドバイスしたり、ときには、禁漁期間中にこっそり釣りをする人やゴミのポイ捨てをする人を見つけては注意する。

「うるさいオヤジと言われようと、こういう人間もいないとね。未来の子どもたちのためにも、美しい川や魚を守っていかないといけませんから、勝手やる奴は許しませんよ。昔の美しい多摩川と、汚染で死の川と化した多摩川と、今再び蘇った多摩川。そのすべてを間近で見てきただけに、絶対に後戻りはしたくないという思いが強いんです」

アユ釣りが禁漁となる冬の間は「冬眠している（笑）」というの谷津田さんだが、3月、アユが遡上する季節が近づくと、もはや居ても立ってもいられない。「今年の戻りはどうかな！」期待に胸膨らませ、目を輝かせて川を見つめた。

*参考　東京都島しょ農林水産総合センターHP

結び葉 column

投網とマメ柿の深い関係

かつての多摩川周辺地域では、庭先に普通の柿より小さなマメ柿が植えられている民家をよく見かけたという。実はこのマメ柿、多摩川のアユ漁とも深い関係がある。投網などの魚とりの網に、マメ柿から作った「柿渋」という天然塗料が用いられているのだ。柿渋とは、真夏にとった青いマメ柿を臼でつき、瓶などに寝かせて発酵させたもの。柿渋には防腐効果があり、網を柿渋に浸してから干すと、強度が増し、網の水切れもよくなって使いやすいという。自然の恵みだから、川を汚すこともない。

投網の塗料となるマメ柿

かつては、こうして地域の自然を上手に活かし、生活の中に取り入れていたのだ。

トラまち活動の ひとコマ

世田谷の歴史をたどる トラまち大学見学ツアー

11月17日(火)世田谷トラストまちづくり大学第3期生が世田谷の歴史をたどる見学ツアーに出かけました。
ルートは三軒茶屋～旧大山道～岡本民家園～静嘉堂文庫～瀬田四丁目広場・旧小坂家住宅。
参加者は昔ながらの街並みや戦前の建物などをじっくり見ながら歩き、座学では学べないまちの空気を感じとっていました。

世田谷トラストまちづくり大学は、環境共生・地域共生の活動を広げるために、まちの環境や人材などの宝物を見つけ伝える力や、自分の経験や能力を現場で活かす、ビジョンと行動力を培うことを目的に毎年開催している連続講座です。今回は、そのカリキュラムの中の第7回目、「まちに残る歴史的景観」と題して、世田谷に残る歴史的環境を訪ねます。

寒い雨の一日、集まった受講者は、集合場所のキャロットタワー展望ロビーから今の世田谷のまちを眺めながら、案内役の財団職員の説明を聞いたあと、世田谷通りと国道246号線がぶつかる交差点に立つ「大山道」の道標から歩き始めました。旧大山道を看板建築、出し桁造りといった古い建築物を見学しながら駒沢大学駅まで歩きます。ここから電車に乗って二子玉川駅へ移動し、今はなき東急砧線の跡をたどり、丸子川（旧六郷用水）を経て岡本民家園へと到着しました。

1

出発は大山道の道標

カサを差しながらみんなで「大山道」の道標をちらりと眺め、さぁツアーのスタートです。

2

雨だから
ルートを少し短く、
はしょりますか？

勉強を
はしょっちゃ
ダメでしょ？（笑）

受付後、ルートとまちの様子を財団職員が解説

雨にけむる今の世田谷のまちを眺める参加者たち。
かつての世田谷はどんな風景だったのだろう？

看板建築

3

これが出し桁造り。
軒先が少し道の方に張り出している。
雨の日でもお客さんが濡れない
工夫のひとつです

古い建物が並ぶ旧大山道へ

出し桁造り

今はない東急砧線跡を歩く

住宅街の小道を歩くと、ところどころに砧線の名残がありました。

4

5

ここは小泉次大夫というお代官様が
開削したことから地元では
「次大夫堀」と呼ばれています

へえ～
初めて知った

旧六郷用水を眺め

6

古い民家の囲炉裏端で暖をとる

参加者全員、囲炉裏でくつろぎ温まりました。

当時、灯りは
どうしていたの？

園内にある茅葺き屋根の旧長崎家住宅の火のたかれた囲炉裏の周りに座り、受講者たちは土間で煮炊きをする当時の人びとの様子を思い浮かべながら、財団職員の話に熱心に聞き入っていました。体が温まったところで、岡本八幡神社、静嘉堂文庫、岩崎家玉川廟へ向います。最終目的地・旧小坂家住宅を見終わった頃には、すっかり日も暮れかかっていました。参加した受講者は、さまざまな歴史的建造物を見学して、当時の様子に思いをはせ、寒さも忘れて世田谷の歴史的環境を堪能した一日でした。

7

本殿手前の柱の面の取り方を
「几帳面」と言って普通の面取りより
丁寧に仕事しています
物事をきちんと行うさまを
「几帳面」というのは
ここからきています

岡本八幡神社の丁寧な細工に目を凝らす

8

森の中の静嘉堂文庫、岩崎家玉川廟へ

静嘉堂文庫の壁面に貼られた黄土色のスクラッチタイルのスジ模様に参加者も注目。

これはスクラッチタイル。
大正末期～昭和初期に流行ったものです
手作業なので少しずつ違なり、
当時が想像できますね

9

長い道のりだったけど、
まち歩きって
おもしろい

最後の見学地・旧小坂家住宅で解散

崖線に残る別邸建築の外観を眺めました。

世田谷トラストまちづくり大学 第4期のご案内

第4期は「世田谷における環境共生・地域共生の暮らし方とまちづくりのススメ」をテーマに、気軽に聴講できる公開講座とまちづくりの手法をフィールドで実践的に学ぶ専門的な講座を予定。区内外の学識経験者や専門家に加え、現場で活躍する区民、財団職員がそれぞれの経験を活かした授業になっています。第4期生の募集など詳細については、当財団までお問合せください。

トラまち topics

トラストまちづくり課の下半期（2009年10月から2010年2月まで）の活動トピックスをご紹介します。

「出会い、学び、つながろう! ネットワーク形成イベント」開催

今年度新たに実施したネットワーク形成イベント（全3回）の1回目は、1月28日（木）「食べるからつながるまちづくり」をテーマに開催しました。参加者は白菜や大蔵大根などの世田谷産野菜を用いた料理を共に食し、世田谷の食・農のあり方を話し合いました。

新たに2件の小さな森契約を締結

松原四丁目、桜上水三丁目で新たに小さな森契約を締結しました。オーナーの方々は、自分のお庭をオープンガーデンすることにより、みどりを通じた人々の交流などにも役立てたいと願っています。これで、小さな森は合計7カ所、財団では区内の小さな「みどりの点」が増えて、「みどりの面」となっていくことを目指しています。（写真上:松原四丁目、下:桜上水三丁目）

新たに1件の市民緑地契約を締結

桜新町駅のすぐ近く、市街地の中に残る貴重な緑地を、8カ所目の市民緑地として契約しました。名称は「桜新町二丁目ウレシパモシリ市民緑地」。アイヌ語で「育ちあう大地」という意味で、所有者の方の願いが込められています。1月16日(土)には、オープニングイベントを開催。光る泥団子づくりやひょうたんマラカスづくりを、300人を超える来場者が楽しみました。

トラまち大 第3期生、企画にも挑戦

9月8日（火）せたがやトラストまちづくり大学の第3期がスタートしました。16名の受講生は約半年間、講義や演習で学び「ひと・まち・自然をつなぐ」をテーマに、区の事業「世田谷・みどりのフィールドミュージアム」と連携して、国分寺崖線の魅力を伝える企画づくりに取り組みました。

しぜんとれきしの「まち発見ツアー」を開催しました。

世田谷の身近なまちを歩き、地域の宝物を再発見するツアーを11月に2回、行いました。参加者は解説員のガイドにより、1日（日）に岡本～瀬田周辺の国分寺崖線の自然を堪能し、フラワーランドまで歩きました。21日（土）「桜新町～深沢」では、世田谷初の郊外住宅地「新町住宅地」の街並みを見た後、一般開放日の深沢八丁目無原罪特別保護区を見学しました。

新たな「地域共生のいえ」が誕生!!

2月に「野草の会・こめこめ庵」（弦巻一丁目）が「地域共生のいえ」に仲間いりをしました。亡くなったご主人の遺志を受け継ぎ、ゆっくり時間をかけて人と人のつながりを育んできた「野草の会・こめこめ庵」は、ご近所の方々の集いの場、高齢者の暮らしを支える場となっています。この場所が、地域の絆を育む場として育っていくよう、夢をふくらませています。

まちづくりファンド拠点部門 2グループが本審査通過!

12月12日（土）世田谷まちづくりファンド拠点部門の本審査会が開かれました。エントリーしたのは、予備審査を通過した「山下・豪徳寺地域情報発信基地設立準備会」と「NPO法人プレーパークせたがや」の2グループ（共に助成申請額500万円）で、どちらも審査員から満票の評価を得て本審査を通過しました。

みどりのボランティア入門説明会を開催

11月15日（日）、トラストボランティアの活動参加者を募るための見学ツアーに、区内外から18名の方が参加しました。参加動機の多くは「区内の自然環境の保全等に関心があった」「地域とコミュニケーションをもっと深めたい」などさまざま。実際に活動に携わるトラストボランティアのメンバーが活動場所を案内しました。現場の話などを聞いた参加者から「始めたい活動が決まった」などの声があがりました（参加者アンケートより）。

図書『生きものを楽しむガーデニング』発行

環境共生の暮らし方の普及と地域の生態系のネットワークの創出を図る、みどりの普及啓発図書「生きものを楽しむガーデニング」を発行しました。本書では、小さなベランダや庭でも実践できる、生きものと共生するガーデニングの楽しみ方とその手法を、イラストや写真をふんだんに使って紹介。子どもから大人まで楽しく分かりやすい本となっています。

A4変形　53ページ
・一般価格 1,000円
・賛助会員、ファンドサポーター 900円
購入をご希望の方は当財団までお問い合わせください。

※当財団の事業については、財団ホームページでご覧いただけます。 http://www.setagayatm.or.jp/

あなたもぜひ、トラスト賛助会員に!

皆様の「世田谷の自然や歴史的文化的環境を守りたい!」という気持ちがたくさん集まることで、より良い環境を次世代へ引き継ぐトラスト運動の輪が広がります。ぜひ賛助会員にご入会ください。
賛助会員費は、環境を保全する費用として大切に使わせていただきます。

会員種別と年会費

個人　年1口 1,000円　・子ども　小学校在学中全期間 1,000円
家族　年1口 2,000円　・法人　年1口 10,000円　・学校　年1口 10,000円

会員特典

1. 情報誌「ひと・まち・自然」等、トラストまちづくり情報の送付
   ＊子ども会員へは、子ども情報誌「ちびモリ」を送付します
2. 財団主催の各種イベントの参加費割引
3. 財団発行の書籍、オリジナルグッズ等の割引
4. 世田谷美術館・世田谷文学館の企画展および静嘉堂文庫美術館への入場料の割引（子ども会員は対象外）
5. 園芸協力店での花苗の割引購入（子ども会員は対象外）
6. 財団マスコットキャラクター「ヤモリのモリモリ」の缶バッチ進呈（子ども会員対象）
7. 財団発行の野鳥図鑑「KEY BIRD50」春夏編、秋冬編進呈（子ども会員対象）

＊詳しくは当財団までお問合せください。

提携美術館インフォメーション

トラスト賛助会員の方は、優待制度がご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

世田谷美術館	**川上澄生　木版画の世界 ～栃木県立美術館所蔵品による** 3月13日（土）～5月9日（日）	＊毎週月曜（3月22日、5月3日は開館）、3月23日（火）休館、4月13日（火）展示替えのため休室
世田谷文学館	**石井桃子展** ～4月11日（日）	
静嘉堂文庫美術館	**国宝・曜変天目と付藻茄子―茶道具名品展** ～3月22日（日） **武家文化の輝き―静嘉堂の古刀と工芸** 4月10日（土）～5月30日（日） **錦絵の美―歌川国貞・歌川広重の世界** 6月12日（土）～8月8日（日）	

＊展示内容等詳細につきましては直接各施設にお問合せください。

ご寄付のお願い

「世田谷のトラスト運動」は、多くの方のご支援によって支えられています。
2009年9月1日～2010年2月28日までに、36名、9団体の皆さま等から、
総額607,019円のご寄付をいただき、ありがとうございました。
今後も引続きご支援の程、よろしくお願いいたします。

エコポイント環境寄附について

当財団は、国の「エコポイントの活用によるグリーン家電普及促進事業」の環境寄附対象団体となり、エコポイントを利用した商品取得と同じ手続きで、ご寄附をいただくことができるようになりました。
詳細については、当財団までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。

・問合せ　☎03-6407-3311　・ホームページ　http://setagayatm.or.jp

せたがやの宝物
setagaya

イチリンソウ

●キンポウゲ科

人びとの暮らしとともに生きてきた雑木林が育む春の妖精

スプリングエフェメラル（春のはかない命）という言葉をきいたことがありますか。それはイチリンソウやカタクリなど、早春の雑木林などで花を咲かせる春植物のことで、春の妖精とも呼ばれています。それらは、林の木々が芽吹く前に葉を広げ、太陽の光を浴びて成長し、木々の葉が茂り林床に日が差さなくなる頃には葉が枯れ、翌春まで土の中で眠ります。

区内では、世田谷のみどりの生命線ともいわれている「国分寺崖線」上の大蔵三丁目公園で、23区内ではほとんど見られなくなってしまった、イチリンソウの群落を見ることができます。

しかし、かつては身近な里山の雑木林や湧水周辺などでよく見られた、イチリンソウをはじめとする春植物は、宅地開発等による自生地の減少により、今ではあまり見ることのできない貴重な植物となってしまいました。また、都会ではライフスタイルの変化によって、雑木林を昔のように生活の中で利用することも少なくなり、いつしか林床の荒廃が進んで、春植物が育つ環境も失われつつあります。

現在、大蔵三丁目公園をはじめ国分寺崖線の雑木林では、地域住民やトラストボランティアグループによって、貴重となった里山の姿を取り戻すために、下草刈りや落ち葉かきといった環境保全活動が行われています。

これからも春の妖精たちが毎年顔を出し、可憐な花を見せてくれる、そんな貴重な環境をいつまでも残していきたいものです。

人の手によって維持管理されている、湿り気の多い明るい雑木林。足元の落ち葉のすき間をよく見ると、春の妖精が顔を出しているかもしれません。

ひと・まち・自然
トラまち Vol.4 2010年3月発行

発行／財団法人世田谷トラストまちづくり
編集／財団法人世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課
〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階 Tel.03-6407-3311（3313） Fax.03-6407-3319
http://www.setagayatm.or.jp/

編集協力 松井編集室
取材・文 小池良実（P2〜9） 山田奈菜（P10〜15）
イラスト 来迎純子（表紙、P8） 南修里（P13）
デザイン 須崎きみ江
写真 佐藤隆博（P2〜7） 小池良実（P4〜9）

©財団法人世田谷トラストまちづくり
2010 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。

世田谷区が進める「世田谷みどり33」に連携し、みどりの保全・創出に取り組んでいます。